

# 星・雪・ひまわり 地域財産を生かすまちづくり

## 映画で全国発信された 名寄市の多様性

平成23年6月、北海道名寄市が主要舞台およびロケ地となった映画『星守る犬』が全国公開され、好評を博した。同作品には名寄市の美しい風景が随所に登場する。

中でも印象的なのは、主演俳優の西田敏行さんが愛犬とともに車の屋根に座り、車の周囲を埋める、まるで黄色い海のような一面のひまわり畑を呆然とした表情で眺めるシーンだ。あまりにも鮮やか、かつ広大なひまわり畑の風景に「あれはCGではないのか」という問い合わせが映画会社に多く寄せられたという。

だがこれは周知のように名寄市の夏の風物詩だ。夏の名寄市には総計100万本以上のひまわりが咲き誇る。特に名寄市のひまわりに特徴的なのは、高オレイン酸を含有する搾油用が多く、その作付面積は日本一を誇る。

搾油された高オレイン酸ひまわり油は名寄ブランド「北の耀き」として販売されている。名寄市のひまわりは観賞用のみならず、地域産業とも密接に結び付いているのだ。

映画を見た人々がCGと勘違いするほどのひまわり畑の絶景こそは、夏の1日の寒暖差（朝夕が涼しく日中は30度に達する）や、1年を通じて晴天率が非常に高く、日照量が豊富な名寄市の気候的特質を象徴する産物といえるだろう。

また『星守る犬』にはもう1人の主演俳優（玉山鉄二さん）がいる。本好きの名寄市役所福祉課職員という設定のため、撮影には実際の名寄市役所および市立図書館がしばしば使われており、そうしたシーンも見逃せない。

映画『星守る犬』の主要舞台およびロケ地に名寄市が最終的に選ばれたに当たっては、平成22年4月に実施された名寄市でのロケハンが決め手となったという。そのときロケハンに訪れた瀧本智行監督ほかの主要スタッフに

「市立天文台の前身は、地元の高校教師をしておられた木原秀雄先生が自費で建設された木原天文台です。木原先生は17年間連続で太陽の黒点観測を毎日実施した方として国際的にもよく知られた天文学者です。中でも年間300日以上も黒点の観測に成功したという記録をお持ちなのですが、つまり名寄市は、木原先生が天文学に没頭するのにふさわしい環境がそろっていたのです」（加藤市長）

たえその年が突出していたのだとしても、観測をより鮮明な状態で可能にしたのは、空気の清澄さとともに、年間300日以上とは驚異的というしかない。

取材で訪れた日の名寄市の最低気温はマイナス12〜13度。2月間近の名寄市としては比較的暖かな日ということだったが、前日の最

## 名寄市内の独自性あふれる地域財産

低気温はマイナス20度に近く、これが厳寒期の平均に近いとされる。さらに「強くしばれる日」には、前述のようにマイナス30度にも達することになる。

これまでに述べてきた季節による寒暖差、夏の朝夕の寒暖差、年間を通じた日照量と晴天率、冬の積雪が生み出す伏流水や天塩川および名寄川の豊かな水量などが醸し出す名寄市の地理的・気象的環境特性は、日本一の作付面積と品質を誇るもち米、北海道随一の収穫量のアスパラガス、さらにはスイートコーン、カボチャなどの高品質で多様な名寄ブランドの農産品をはぐくむ要因ともなっている。寒さもまた名寄市の重要な地域財産の基盤になっているわけだが、今回は名にし負う厳寒期の名寄市取材で訪れるというめったにない機会が得られたのを幸いに、名寄市のご協力で、市内各所に点在する独自性あふれる地域財産の数々を巡ってきた。

既に触れた市街地から北方向の名寄川を隔てた近郊にある「なよろ市立天文台きたすば



高オレイン酸ひまわり畑と搾油の様子



ロケハン・チームは名寄市の環境が大いに気に入られ、いくつかの候補地の中から名寄市をすんなりロケ地に選定した。結果的に加藤市長は、就任2日目にして早くも、自身の重大なマニフェストの一つでもある「名寄市の全国発信」に重要な役割を果たすことになったのだ。

映画『星守る犬』のロケ地に名寄市が選定さ



全国に感動を呼んだ映画「星守る犬」のロケ風景



かとう たけし  
名寄市長

直接対応したのが、なんと「就任2日目」の加藤剛士・名寄市長だった。

「何しろ前日に市長就任したばかりでもあり、庁舎内の各部署や関係各所へのあいさつ回りに大変忙しい時期でした（笑）。その真っ最中にスタッフの皆さんが来られたのです。私もよく事情の分からないまま、たまたま民間事業者時代に高オレイン酸ひまわり油の製造販売事業を行っていたため、名寄市のひまわり情報などをかなり詳しく語らせていただいた経緯があります」



薬用植物資源研究センターの薬用植物園と乾燥させた薬草棚



「次を訪れたのは薬用植物資源研究センター（独立行政法人医薬基盤研究所）である。冬場は雪に閉ざされ、屋外の薬用植物園を見学することはできなかったが、研究棟では春から秋にかけて栽培された、寒冷地に生育する北方系薬用植物（ゲンチアナ、ダイオウ、モツ

れている。

この名寄ピヤシリジャンプ大会の、札幌冬季五輪を翌年に控えた昭和46年開催の第1回目と第2回目（同年は3月と12月の2回開催。通常は毎年12月のみ）の優勝者が笠谷幸生選手なのだ。世界中のジャンプ台およびスキー場を知る笠谷選手はそのとき「ピヤシリの雪質は日本一です」との言葉を残した。それ以後、ピヤシリスキー場を訪れるスキーヤーたちの間で「名寄の雪質は日本一」との評価が定まり、今日に至っている。



素晴らしい環境の中に建つ、なよろ市立天文台「きたすばる」と口径1.6mの大望遠鏡



が、天文台では年間を通じて最も空気が澄む時期ということもあり、北海道大学の研究者や天文台に勤務する市専門職員たちによる天体観望は活況を迎えていた。取材日はたまたま休館日だったのだが、関係各位のご協力で口径1.6mの大望遠鏡を目の当たりにし、プラネタリウムも体験できた。

また北海道立サンピラーパークでは、国際規格のカーリング場がいつでも使えるようにきちんと整備されており、テレビでしか見たことのない氷上のチェス、カーリングの舞台（氷上）に立つことができた。

取材当日は折しも、雪質日本一とされるピヤシリスキー場のジャンプ台（名寄市ピヤシリジャンプ）などで開催される「第49回



サンピラーパーク内のカーリング場

数々の広大な公園が境を接して立地する周辺一帯は、取材時にはもちろん積雪に埋もれていた

全国中学校スキー大会ノルディック競技大会（2月1日～4日）の開会前日でもあった。実際の競技を見ることはできなかったが、迫力ある70m級ジャンプ台（ピヤシリジャンプ）を遠望しながら、市外から訪れていた小中学生のスキー教室の模様や、陸上自衛隊名寄駐屯地の自衛官たちのスキー訓練の様子などを見ることができた。



雪質日本一のスキー場として知られるピヤシリスキー場（自衛隊のスキー訓練）

ところで、ピヤシリスキー場および名寄市に降る雪の質が日本一といわれる理由を、今回、初めて知った。そもその発端は「札幌冬季五輪のジャンプ（70m級）で金メダルを獲った笠谷幸生選手の高い評価」（加藤市長）にあったのだそう。

名寄市ピヤシリジャンプは札幌冬季五輪開催の前々年（昭和45年）に開場した。そして開場の翌年に始まった「名寄ピヤシリジャンプ大会」（毎年12月中旬開催）は現在、冬シーズン・ジャンプ競技の皮切りの大会として知られ、日本の第一線の選手がこぞって参加するシーズン最初の重要な公式戦と位置付けら

コウ、トリカブト、エゾウコギなど）を中心にさまざまな研究・評価の実施、春に向けた苗づくりなどが活発に行われていた。

実現にはまだ調整が必要だが、名寄市との共同企画による今後の地域振興事業計画（昨年は薬用植物園見学会の共同開催も行った）への参画の可能性を含め、この施設も名寄市の地理的・気象的条件を活用した地域財産の一つであることは確かだろう。

厳寒の市内巡りはさらに平成18年3月に合併した風連地区の「ふうれん地域交流センター」（風つ子ホール）、保健福祉学部の特化した日本最北の公立大学「名寄市立大学」（同じ敷地に児童福祉サービスや児童教育の専門教育機関に特化した市立短大もある）、道の駅「もち米の里なよろ」、中心市街地南側に設営が始まっていた「なよろ雪質日本一フェスティバル会場」（2月8日～12日）へと進み、白銀の市内ツアーが終了した。

### 営業戦略室が 名寄市政に果たす重要な役割

加藤市長は平成22年4月の市長就任以来、初年度は各種継続事業の安定的遂行と同時に、主にこれまで述べてきたような名寄市の地域財産を活用した新たな地域振興策（まちづくり）の可能性を、多角的に模索してきた。その本格的なステップは就任2年目を迎えた平成23年4月1日付けで実施された大幅な機構改革に

よって幕を開けることとなった。

それは従来の組織構造にあった産業振興課、企画課、風連地区振興課を、新設した営業戦略室営業戦略課に集約一元化するというものだ。これによって、分散していた商工業の振興、労働行政、物産振興、観光振興、国内・国際交流、移住・定住、企業誘致などの各種業務が、一つの窓口を集約されることとなった。

「従来の産業振興課、企画課、風連地区振興課の諸業務は、大きな意味で名寄市を全国発信し、その成果を獲得することで、各産業の振興などに結び付けるという点で共通していたんですね。もちろん細かな違いや専門性の違いはたくさんあるわけですが、この際、それらを横断的な広い視野で一括担当する部署を設けることにより、いろいろな意味で風通しをよくしていこうと考えたのです」（加藤市長）

加藤市長はまた「民間企業にあって行政にない最大の視点が『営業の発想』です。それを営業戦略室にすべて委ねるといふことではなく、営業戦略室を設けることによって周知徹底の底上げを図り、庁内全体の共通認識としたい」とも語る。営業戦略室はいわば名寄市発信の司令塔的役割を果たす部署といえるだろう。

同時に営業戦略室の視線は、外部への発信だけでなく、市民への発信にも向けられている。本ルポの冒頭から、名寄市の特徴的な自然



風連地区の夏の風物詩「風連ふるさとまつり」(8月)

さて、今回の取材では目にすることができなかったが、名寄市の冬季の自然現象として象徴的に語られるものに、マイナス20度以下でないといえないサンピラー(太陽柱)現象がある。原理的には大気中の水分が凍結し、細かな氷の粒となって空気中に漂い、その連なりに太陽光が反射して光の塔ともいべき輝きを放つ現象だ。ダイヤモンドダストと呼ばれることも多いが、ダイヤモンドダストは正確には空気中の凍結した氷の粒が輝くだけで、これは比較的よく見られるそう。しかし、それらが連なって太陽光を反射し、あた

かも光り輝く一本の塔のように見えるサンピラー現象はめったに見られないという。だがこれまでご紹介してきたような、名寄市に存在するさまざまな輝きを持つ地域資源が集められ、多面的に名寄市を発信するため戦略である観光振興計画の施行によって、互いに呼応・連携し、交流人口の増大などにつながる効果をそれぞれに発揮し始めるようになれば……。いつか名寄市ならではの大自然が生むサンピラー現象のように、光の連なりが太い一本の塔となるような、大きな輝き(成果)に結び付いていくのではないだろうか。

その兆しは例えば、厳寒の名寄市内に点在する地域資源をめぐる前述の「白銀の市内ツアー」のプロセスにおいても感じられた。JR名寄駅を挟んで、ピヤシリスキー場方面とは逆方向の市街地を進んでいたとき、衣食住に関するあらゆるメジャー量販店の「名寄店」がずらりと並ぶ一画が突如、現れたのだ。旭川市より北側の北北海道地域において、このように大規模量販店がずらりと並ぶ風景は、名寄市が「北限」だという。

既にご紹介した薬用植物資源研究センターにおける研究者の言葉がここでよみがえる。研究者は名寄市に研究センターが置かれていく意味について、「交通の至便さ、研究にかかわる周辺環境の良さ、



雪像彫刻やスノーオブジェのコンテストが人気の「なよろ雪質日本フェスティバル」(2月)

外への周知活動の徹底、さらにそれらをあらゆる産業振興に関連付けていこうとする点で非常に興味深い施策であり、戦略的なビジョンといえる。

### 近未来の名寄市を見越す 観光振興計画

名寄市観光振興計画は平成18年度の合併以後、最初に策定された名寄市総合計画(前期計画の実施期間は平成19年度〜23年度、後期計画は24年度〜28年度)の観光振興にかかわる計画を補完するアクションプランという位置付けだ。年間交流人口の増大を目標に28年度までを実施期間としている。しかし、事業の最終達成目標年度を10年計画の平成33年度としているため、平成29年度にスタートする

第2次総合計画前期基本計画に基づく見直しを、平成28年度中には実施する予定で、それを前提とした具体的な事業戦略および目標値が設定されている。

「この観光振興計画は、営業戦略室を中心に市民の皆さんとの協働により、策定作業を進めてきたものです。観光振興というタイトルにはなっていますが、ビジネス面との連携、移住・定住への波及効果などをベースに、最終的には交流人口の増大および定住人口の増大をも目指すものです。さらにその前提として、名寄市には本当に素晴らしい地域資源がたくさんあるということを市民の皆さんにもっともっと知っていただきたい。そういう思いの込められた文章も随所に織り込み、市民の皆さんにパブリックコメントを求める形で施行前の周知を図っています」(加藤市長)

同計画は「まずは市民みんなで力を合わせ、できることからやってみよう」「名寄市を営業していこう」という意識の周知を図ろうとする意図が、明確に出ているところが特徴的だ。観光振興を切り口に、名寄市全体の元気を獲得するための行政・市民・事業者の役割分担などにも細かく言及している。

その具体的な詳細については、取材時点では同計画へのパブリックコメントの募集・集中中であつたため触れることは避けたいが、市民および全職員の意識改革を図るという意味でも、実際の振興効果とともに平成24年度からのスタートが大いに注目される。

適度な都市的集積および産業集積、大学をはじめとした教育機関の集積など、あらゆる側面から考えた場合、北北海道地方において名寄市はかなり理想的な位置付けができる」と語ってくれたのだ。

進出地域を選定する際に決して妥協をしないことで知られる大規模量販店がここ数年、名寄市に急速に林立したという事実が、その言葉を別の角度から裏付けている。交流人口の増大を目指す名寄市にとって、これはまさに一つの兆しといえるべきだろう。

北北海道の中核都市として、名寄市の各種の資質的な輝き(光)が近い将来、サンピラー現象のように大きく連なり、かつ花開くことを期待したい。

(取材・文 遠藤 隆)



名寄ブランドの食産品が勢ぞろいする道の駅「もち米の里なよろ」の店内(下)とオレイノ酸を豊富に含んだひまわり油「北の耀き」

